

インドネシアごみ銀行の参加・協力に対する意識構造分析

北九州市立大学 学生会員 野澤佳奈子

非会員 インドリヤニ ラフマン

正会員 松本 亨

1. 研究の背景と目的

インドネシアでは近年、急速な経済成長と都市化の進展、インフラ整備の遅れから、廃棄物問題が深刻化している。河川等への投棄、埋め立て量の増大とインフォーマルセクターの社会問題は深刻であり、政府による収集・処理体制の整備とともに、コミュニティベースの資源ごみ収集体制が注目されている。具体的には「ごみ銀行」と呼ばれるインドネシア特有のシステムであり、ごみ銀行は仲介機能を担い、住民が持ち込んだ資源ごみをリサイクル業者に販売する仕組みである。住民は、ごみ銀行がリサイクル業者から受け取った収入を受け取り、預金することもできる。

本研究では、インドネシアのごみ銀行の成立要件について、ごみ銀行がもたらすごみ問題の改善や資源の循環といった公益の面と、ごみ銀行の活動に参加する事によってお金を貯めることができるといった私益の両面から、参加・協力に関する意識構造を明らかにすることを目的とする。著者らの先行研究¹⁾では、ごみ銀行の有効性認知やごみ問題に対する責任、周りの評価が参加意向に影響を与えることがわかった。ごみ銀行の会員・非会員の参加要因に違いがあることも明らかにした。本研究では、要因に私益面を加え、さらに調査対象都市を拡大する。

2. 研究方法

本調査では、インドネシアのごみ銀行を訪問し、アンケート並びにヒアリング調査を行うことでデータを得た。7つの都市の計12のごみ銀行を対象とした。表1に、アンケート調査の設問概要を示す。

ごみ銀行の参加形態には、会員と非会員がある。会員と非会員の間に参加・協力に対する意識の差が存在するか、クロス集計とウィルコクソンの順序和検定を用いて分析した。また、参加頻度についても同様の分析を行った。

さらに、参加頻度について、共分散構造分析を用いて意識構造分析を行った。

3. 参加形態・頻度による意識の差

3.1 参加形態 会員と非会員

クロス集計とウィルコクソンの順位和検定の結果を表2に示す。この結果から、パダン市、ランブン市、メダン市、スラバヤ市、マラン市は、会員と非会員の意識の差が大きく、バンドン市は意識の差が小さいことがわかる。バリクパパン市は非会員からのみの回答であったため、分析の対象から外した。表3に、対象としたごみ銀行の特徴をまとめた。これらの結果から、会員と非会員の意識の差が大きい都市のごみ銀行は、会員であるメリットが大きいという特徴があることがわかる。その結果、住民は会員として積極的に活動に参加すると考えられる。また、上位5つの都市のうち、スラバヤ市とマラン市が他の3つの都市と比べ意識の差が小さい理由は、インドネシアの中で最もごみ銀行の活動が盛んであるため、会員でなくても参加できるごみ銀行があることや、住民の環境に対する意識が全体的に高いことが考えられる。

3.2 参加頻度

クロス集計とウィルコクソンの順位和検定の結果を表4に示す。Q2、Q3、Q4を除くすべての質問で、参加頻度による意識の差が見られた。参加頻度は、ごみ銀行の活動に対する参加・協力意識と強い関係があるといえる。

4. 共分散構造分析による意識構造の分析

3章で参加頻度と参加・協力意識の関係がわかったことから、共分散構造分析を用いて意識構造をより詳細に分析する。まず因子分析を行った結果を、表5に示す。これをもとに潜在変数を想定し、意識構造モデルを仮定した。図1に、全サンプル(n=1,495)における共分散構造分析の結果を示す。GFI=0.983、AGFI=0.967、CFI=0.980、RMSEA=0.040より、このモデルの適応性は高いと判断できる。「行動意図」への標準化係数が大きいのは、社会規範評価である。参加者のモデルで「行動意図」への標準評価係数が大きい

